



## 人生最後の運転免許更新に挑戦！

後期高齢者が視力回復のため白内障の手術をして、運転免許証更新に挑んだ記録

中山 秀一

『87歳の男性が運転する乗用車が信号を無視して暴走、自転車に乗った母親と女兒を死亡させ、さらに歩行者4人をはねる』という痛ましい事故が大きく報じられた。

2019年4月19日に起きた池袋の事故をきっかけに、高齢者の免許証を自主返納する動きが急増し6万人を超えたという。このような報道に、筆者のような後期高齢者は、そろそろ免許証の返納をしたらどうだ、という無言の圧力を感じる昨今だ。

これらの暴走事故で必ず報じられるのが、「ブレーキとアクセルを踏み間違えた」という事故原因である。これは、ブレーキとアクセルを右足一本で踏み換えているから起こるもので、ブレーキは左足、アクセルは右足、というふうに、左右の足の役割分担を決めれば、「踏み間違い」による事故は即座に解消する。

筆者は、すでに50年も前から、ブレーキは左足で踏んでいる。この「左足ブレーキ」の件は、稿を改めて記事を書きたいと思っている。

今回のレポートは、池袋の暴走高齢者よりも1歳年上の88歳男が、運転免許証の更新に挑戦した体験記である。

更新が叶えば、91歳まで有効の免許証を手にするようになるが、これが多分、筆者にとって人生最後の免許更新になるに違いない。

2019年9月17日には新潟市で、なんと100歳の男が歩道に乗り上げ、歩行者

をはねたという記事を目にした。

100歳で車を運転するとは、車がよほどの必需品だったのだろう。原因については、「気が付いたら歩道に乗り上げていた」と本人が言うのだから、運転技量以前の認知機能の問題ではなかろうかと推測される。

池袋の暴走事故も、最初のきっかけは、歩道に左前輪を乗り上げてしまったので、慌ててブレーキを踏んだつもりが、アクセルを踏み込んだので暴走してしまった、というのが実情らしい。

この場合も、「歩道に乗り上げてしまった」というのが最初の原因のようだが、前述と同じように、認知機能に問題があったのかも知れない。

### ☆高齢者講習の義務化

高齢のドライバーには、70歳を迎えたら、2時間コースの講習を受講することが、免許更新の条件として義務付けられ、1998年(平成10年)から実施されており、その内容は以下ようになる。

- 70歳から74歳までは、
  - ①講座：道路交通法の現状
  - ②運転適性検査：視力、視野、聴力など
  - ③実車講習：実際に車を運転してコースを走る
- 以上を含めて合計2時間のコースとなっている。

そして2008年(平成20年)から、

75歳以上の高齢者には、基本講習に加えて、新たに認知機能検査が義務付けられており、合計約3時間のコースになる。

実際の運用はどのように行われているのか、都内の場合、46校ある自動車運転教習所が警視庁から委託を受けて、高齢者ドライバー講習と認知機能検査も併せて実施している。

さて、筆者の場合は当然、75歳以上が対象の認知機能検査も含むフルコースを受講することになる。

そこで、最寄りの中央線武蔵境駅近くの「自動車教習所」に予約を入れ、2019年6月21日に受講し、無事終了することができた。

因みに認知機能の「検査結果通知書」には、総合点78点で、「記憶力・判断力に心配ありません」というコメントが付いている。

それにしても、76点未満が落第点なので、78点ではかろうじてスレスレの合格という感じだ。

### ☆教習所管理者にお話を伺う

今回この記事を書くために、写真の撮影などでお世話になった、武蔵境自動車教習所の管理者・玉川勝氏に、お話を伺った。

玉川氏は、警視庁で白バイの乗務を20年間務めた経歴があり、同教習所の勤務も30年という実績の持ち主である。

同教習所は1960年に社員10名で発足、



（俄武蔵境自動車教習所 管理者・玉川 勝氏）

現在 150 名で運営している。香川県に「坂出自動車学校」を経営しており、教習所一本の経営方針である。

最近の傾向として、若者の免許取得者が減っており、東京都内で見ると、2000 年までは 62 か所の教習所があったが、現在では 46 校まで減少している。つまり車離れが増えており、その要因として公共交通機関の発達で車が不要、維持費用として、税金、保険料、車検等の整備費、駐車場料金等々の負担が考えられる。

講座の内容は、概ね 3 年に一度改正される道路交通法の解説、時代とともに変化する交通事情に合わせ、講習の内容も変わる。

一例として 2017 年 3 月まで採用していた、ドライビングシュミレータによる反射反応テストは、実情に合わなくなったので廃止された。

警視庁は「事故防止対策有識者会議」を主催しており、同教習所の職員の一人が委員になり、実際の現場事情について、意見を述べている。

最近では、高齢者の事故が大きく報道されているが、1 年間（2018 年）の死亡事故は 143 名で、そのうちの 42% は高齢者によるものだが、実際には若者による死亡事故が半分を占めて、相半ばしているのが実情である。

同教習所では、高齢者講習を受講した人を敬老の日に招待。1 時間の講義と実車の運転をセットにした「シニア運転サポート教室」を催し、これを車の生涯教室と名付けて実施している。

若者の受験生が減少傾向にあるなかで、高齢者が元気で長く運転が出来るようにサポートしようという、教習所の姿勢が伺われる。

### ☆高齢者講習受講体験

誕生日の前後 2 ヶ月の間に更新をしなければならない。

筆者は白内障の症状を自覚するようになり、視力が低下して、更新期日の半年ほど前には、視力が 0.6 まで落ちてしまっていた。免許更新の条件には、まず視力の確保が必要であり第一関門は視力 0.7 以上が必須となる。そこで、更新期日の約半年前に、白内障の手術を受けた。

参照：（手術の体験記は本誌 2019 年 7 月号に掲載）。

術後の視力が回復安定するまで、余裕をとったつもりである。そして半年後の視力は、手術をした病院で検眼すると 0.9 とあり、検査担当者からは、「これだけ視力があれば免許の更新は楽勝ですよ！」と病院の身びいきのようなお告げであった。

メガネ店での検眼では「0.7 ぎりぎりですわね」という冷たいお達しで、その落差にがっくりと気を落とす。

落ち込んだ気分であったが、予約をしたあった「自動車教習所」に出向き、高齢者講習を受けることになった。教習所の雰囲気は、とても良好であった。



レッサーバンドのマスコットが高齢者を迎えるロビー

### 〇いよいよ認知症のテスト

先ず最初に、検査用紙の表紙に、名前、生年月日、性別、と車の運転頻度などを書き込む。次に、テスト当日の年月日と曜日、最後に今の推定時刻が問われるので解答用紙に記入する。

筆者のような、会社勤めが無くなった退職組は、日時に束縛されない日常なので、今日の年月日、特に日にちと曜日を忘れて



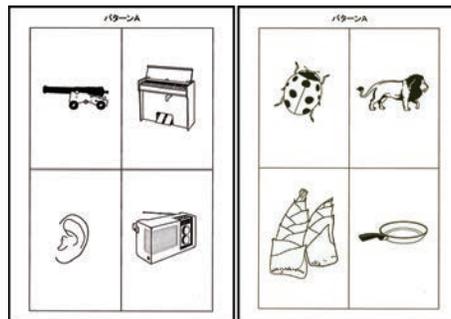
認知機能テストの教室、10 数名の受講者でコンパクト

いることがある。筆者も前回のときには、うっかり日にちを間違えてしまった。これは事前に確認して講習に臨むようにしたい。

### ◇絵柄を記憶する

次は、「イラストの記憶」という、面白いテストである。つまりパターン認識と記憶の問題である。

下記のような、解りやすいイラストが、講師の大型モニターに、1 枚あたり 1 分で順次表示される。



この他に 2 枚、計 4 枚 16 種のイラストを 4 分間で暗記

実際には、上記のように、1 枚に 4 種のイラストが描かれたパターンが、順次モニター上に表示される。その順次とは、1 枚あたり 1 分間の表示である。受講者は、1 分間に 4 種のイラストを計 4 枚、16 種のイラストを丸暗記する。つまりパターン認識の能力を発揮して、もっばら覚え込む。この時点では、何の脈絡もない絵柄 16 種を頭に叩き込むのだ。

それが終わると、次に妙な問題が出る。1 枚の回答用紙に、1 行 10 文字の数字が 10 行、計 100 個の数字は何の規則性もないアトランダムに並ぶ。これは大変だと心理的に追い込まれる。講師からは 2 つの数字、例えば「1 と 4」の数字が示され、こ

の沢山の数字の中から、その1と4だけに斜線を引いて消す作業を30秒間やらされる。用意スタート！で、受講者はしゃかりきになって少しでも多く、とがんばるので、直前に覚えたイラストを忘れてしまいそうになる。

## ◇問題には仕掛けがあった

このテストは、実はイラストを忘れさせるのが目的だったようだ。せっかく頑張った数字のテストは何の採点もされず、単に、先ほど覚えたイラストの記憶を錯乱させるのが目的であった。

それを知っていれば、この問題は何も回答しないで、先ほどの覚えたばかりのイラストを、目を閉じて繰り返し思い出し、脳裏に焼き付けるのが賢明だ。因みに、この錯乱用の問題は、回答を書かずに白紙で提出してもOKだそうである。3年後に再度高齢者講習を受ける方は、この要領を覚えておくが良い。

ところで、イラスト問題の解答は、2回にわたって行われる。まずは、最初に覚えたイラストをどのくらい思いだせるか、何のヒントもなしで、思い出せるままに、16種類のイラストの名前を解答用紙に順不同に書き込む。

筆者の場合、この時点では半分くらいしか思い出せなかった。次いで、イラストに当てはまるヒントが示される。例えば、①戦いの武器、②楽器、③体の一部、④電気製品、⑤昆虫、⑥動物、⑦野菜、⑧台所用品…など16種のヒントが書かれた解答用紙が配られる。

ここで、ヒントを頼りに追加を思い出して、イラストの名称をさらに書き込むという要領だ。筆者の場合、この2次回答で、13種類くらいの正解が出来たと思ったのだが…。

## ◇予備勉強は逆効果

実は、この認知症検査の問題集は、警察庁のHPで公開されているのだ。そこには、このイラストの問題集が掲載されており、4枚16種のイラストを1パターンとして、

パターンAからDまでの4種類がすべて公開されている。それを知っていた筆者は、すべてのパターンを記憶しようとしたのだが…。

高齢者講習では、そのAからDまでのパターンを、日替わりでランダムに出題しているようだ。それはヒントが同じでも、日によって絵柄が異なっているということだ。例えば「戦いの武器」は、大砲のほかには戦車、機関銃、刀、と4種類がある。

筆者の場合、事前に他のパターンの絵柄も見てしまっていたので、大砲と書くべき所を戦車と書いたりしてしまって、減点があったのではないかと反省している。

## ○講座（道路交通法など）

およそ3年で改正になる道路交通法を中心に、実情に沿った内容の講義を受ける。

## ○運転適性検査

通常の視力検査のほかに、夜間の視力、動体視力、視野検査などを、測定機器を使っておこなう。動体視力の検査とは、ドライバーは、車で走りながら、過ぎ去ってゆく道路標識などを認識しなければならないので、その能力をチェックすることだ。

例えば、野球の選手は、ピッチャーの投げ速球が止まって見える、などと言われるが、この能力は天性のものか、訓練で向上するのか、興味のあることだ。

さて、筆者の通常視力の検査結果は、何と0.6と出た。病院とメガネ店、そしてこの高齢者講習、測定のたびに結果が悪くなる。これでは最終判定となる運転試験場で、跳ねられてしまうのではないか、かなり心配になる。

## ○実車による講習

- 実車講習の目的は、
- ①認知：信号の認知、標識、見通しの悪い交差点など、走りながら見て情報をとること。
  - ②判断：止まること、自転車がいたら速度を落とすという判断。
  - ③操作：アクセルから足を離してブレーキ



車庫入れの実車講習、車庫の雰囲気は現実と異なる

に踏み換える機敏さ、スピードを緩める、ハンドル操作で避ける判断。これら3つの項目を講習で再確認するのが目的である。と玉川氏は語った。

この日の受講者は3人一組になって、高齢者講習専用を示す、レッサーパンダのマスコットが描かれている車に乗り込み、筆者が先頭を切って運転をする番となった。

筆者の足元を見た講師は「左足のブレーキですね」と、特に問題はない様子だ。「もう50年も前から左足です」と答え、「あなたの運転歴は私よりもずっと先輩ですね」と思いもよらない言葉が返り戸惑ってしまった。因みに筆者の免許証取得は1961年3月7日で、ゴールド免許である。

教習所のコースには建物が無いので、見通しが良すぎて、信号などの存在に実感がわからない。バックによる車庫入れは、どんぴしゃにうまくいったのだが、実際の車庫入れとはひと味違う感じだ。

今回初めて体験したのが、縁石に乗り上げると、すぐにブレーキを踏むという課題だ。これこそ左足ブレーキの見せ場だと、張り切って臨んだ。

縁石の前でアクセルを吹かして、縁石の角にタイヤが乗った瞬間に左足を踏んで止めてやろう、と意気込んだ。結果はうまくいったようだと言っている。



誤って縁石に乗り上げたら即ブレーキ、素早い反応を！

この、縁石乗り上げ即ブレーキというのは、コンビニや歩道の縁石にうっかり乗り上げてしまったときに、慌てないで直ちにブレーキに踏み換えるという、素早い操作を習得するのが目的だと伺った。

#### ☆最終関門・運転免許試験場での判定

最後の関門、更新免許を取得するための手続きと、新しい免許証を手にするまでの行動だ。

そのためには、教習所のような民間の事業所ではなく、都内3ヶ所だけしかない、警視庁直轄の「運転免許試験場」に出向かなければならない。幸いなことに、そのうちのひとつが、わが家に近い府中市にあるのだ。バスに10分ほど乗ると試験場のまん前に止まるので、便利なことこの上ない。



警視庁運転免許本部・府中運転免許試験場入り口

運転免許試験場というのは、新たに運転免許を取得しようとする人たちの学科試験を実施したり、交通違反等で免許停止になった人たちの再教育、国際免許証の発行と、多岐にわたる業務を行っている。

今日では、免許の更新をする場合には、優良運転者（ゴールド免許の持ち主）でも、最低30分の講習を受けなければならない。更に違反経歴の持ち主は、相応の講習が必要になる。試験場は大変混雑しているが、概ね午前中に集中しているようだ。

教習所での高齢者講習の受講終了者は、運転免許試験場での講習は免除される。したがって、手続きは簡単で、2時間足らずで新しい免許証を手にすることができる。

筆者は、最も空いていそうな週半ばを狙って、9月上旬の午後2時半に手続きを開始、4時には新しい免許証が交付された。

#### ○高齢者免許更新の手順

その手順は、

①案内窓口にて、教習所発行の認知機能検査結果通知書と現行の免許証を提示。申請書類を受け取り、名前と生年月日などを記入。

②適正検査：筆者の最も気にしていた視力検査である。大きな検査ボックスの覗き穴から、お馴染みのランドル環と呼ばれる環の切れ目の位置を、下とか右とか、声で検査官に伝える。

検査官は、何やら用紙にペンでなぐり書きをしてくれる。その紙を持って、次の判定デスクに手渡す。判定官は、書類を見渡してスタンプをパンと押ししてくれた。合格ですか？と聞くと、OKだということだ。思わずありがとうございます、と声を出してしまった。

なんだか拍子抜けの感じで、あれほど気にしていた視力が、0.7の規定を簡単にクリアしたのだ。何となく力が抜けた感じで、次の手順に移動する。

③次の窓口では、書類の確認をして、新規登録の手続きをする。

#### ◇写真撮影

④最後は写真の撮影：ここでは、免許証にはめ込む写真を撮影して、免許証の文字と写真をカードと一体構造に合成する装置で、大分以前から使われている。

小さな部屋に、ブルーの背景があり、その前に腰かけると、目の前に写真合成装置がありレンズが見える、その上からLEDライトのパネルが、フグの提灯のように取り付けられている。このパネルライトが曲者で、オデコのすぐ上から照らすので、頭が薄くなり始めた受験者の上げ上がりを強調する結果となっている。

筆者などは、今回更新できた新しい免許証を見ると、頭の上にぜんぜん毛が見えなくて、人には見せられないシロモノになっている。たとえ、他人に見せるにしても警官か、古物買取人くらいのものだが。

それが嫌な人の中には、持ち込みの写真ももちろん受け付けている。自分が最

も気に入った写真を、試験場が指定するサイズで提出すれば、免許証と一体構造に合成してくれる仕組みになっている。

あとは、2階の免許証交付の部屋で待つこと30分、新しい免許証を手渡された。見ると、3年後の期限が切れるのは、何と91歳の9月ということになる。これを機に、更新なった免許証で、気持ちも新たに、大好きな運転を今後も続けたいと思っている。

これで、高齢者の免許証更新体験記を終わるが、振り返ってみると、筆者の高齢者更新は、今回が6回目になるはずだ。そこで今回最も強く感じたことは、教習所も試験場も、その職員の態度が、昔とは全く変わったということである。

教習所の教職員は、もと警官が多いのは当然のことだが、実習と座学を担当する人たちも、以前は、いかにも「教官」という感じだったが、今は「講師」というソフトなイメージだ。

一方、試験場の方は、当然警視庁の職員だと思われる、中には警察官の現場経験者も居られるのかもしれない。皆さん実に親切である。まさか教習所のように、受験者を「お客さん」とまでは呼ばないにしても、最後の難関である「免許証を国から交付する」という偉い立場にありながら、官僚のような態度は皆無で、実に爽やかな印象であった。

さらに、高齢者に対して、そろそろ免許証の返納を考えたらどうですか、というような雰囲気は全く感じられなかった。それどころか、条件さえ揃えば高齢者であっても、できるだけ交付をしようという姿勢が感じられ、感慨深いものがあった。

Syuichi Nakayama  
日本映画テレビ技術協会名誉会員